老舎の小説の価値を論ず

夏　　宇　継

老舎が後世に残した不滅の文学的業績の中で、彼の文壇デビューとなった長編にせよ題材の領域がかなり広い中・短編にせよ、小説がかなりの比重を占めている。「老舎ブーム」がまさに高まりつつある近年、人びとは中国現代文学における彼の小説の崇高な地位に対して共通の認識を持っただけでなく、その価値に対しても、文学史における地位、内包する哲理、比較文学、少数民族文学（満州族文学）、俗文学、北京文学（生粋の北京人の生活を北京なまりで描いた北京的色彩の文学）、心理学などさまざまな角度から検討を重ね、文学研究界においてすでに著しい成果が認められている老舎研究をさらに深化させている。

老舎の小説の多重的価値に対して、このような短い文章ではさまざまな角度から逐一細かく述べることはできない。そこで、文学のもつ二種類の基本的な価値の類型、すなわち作者の心理的、精神的欲求を満たす主観的価値（主体的価値、個人的価値とも）と、ある種の客観的な社会的要求を満たす客観的価値（客体的価値、社会的価値とも）を手がかりに検討を加えてみたいと思う。

1．主観的価値

文学を創作する者にとって、個人の精神的欲求はおもに自我の実現と情感

の発散という二つの面において表現される。全体的に見て老舎の小説の場合には、外国文学の影響は外因の一にすぎず、内因としての、老舎本人の自我の実現と情感の発散という二重の欲求にもとづいて創作がなされている。老舎は若い頃小・中学校で教育に携わったが、この頃創作を始め、『她的失敗』(彼女の失敗)(1921)、『小鈴児』(1923)などの短編小説を発表した。そして一九二〇年代には長編処女作『老張的哲学』(張さんの哲学)を世に出した。老舎は、自分は文学が好きであると常に率直に語り、「私は文学を愛し続ける」と心のうちを披瀝する。そして「私がやらねばならないことは必ずや私にできることであり、私が小説の類のものを書けるということは、書くということが疑いもなく私の仕事なのだ」と明確に述べている。[1)]

老舎のこれらの言葉は、彼個人の潜在的能力に対する認識、個性の全面的発展に対する欲求、そしてより高度なレベルの自由な存在を創造することへの願望を表している。まさに老舎自身がこのような欲求を内に抱いてロンドンに渡って教鞭を執り、良い環境でたくさんのすぐれた世界の文学にふれた。この時、彼は真に自我を実現する機会を得たことを悟り、一編また一編と長編小説の創作を始めたのである。そしてこれより絶えず努力し続け、その結果としてさまざまな形式の文学の創作の中で個人の生命の価値を十分に感じ、自我の実現と同時に文学の個人的価値を実現した。彼はまた「私はどのようにして『老張的哲学』を書いたか」という文章の中で、自分が小さいときから貧しかったことにより形成された「好罵世」(世の中を罵ることを好む)という創作の心理に言及している。「好罵世」、この三つのきわめて簡単明瞭な語は、主体的な情感の発散という欲求の形象化をあらわし、社会、人生、個人的境遇に対して作家が深い思いを抱いたり深刻な体験をしたときに心の中に激しく起こった巨大な矛盾や痛み、苦しみは、喉につかえた魚の骨を吐き出すように、ありたけを述べずにはいられない強烈な創作の動機であったことを反映している。貧困という生存環境の中で形成された世俗への憤怒というこの特別な鬱屈は、老舎に、広範な世界文学の宝庫の中から極めて

自然に現実主義を批判する思想的傾向と芸術的手法を選ばせた。こうした視点から見ると、老舎の多くの小説が、内容の上で主に現実の醜悪、暗黒から出発し、反動的な搾取階級によって統治された社会の歴史的本質を集中的に掘り起こし、しかるのちに芸術的に展開しているのが容易に理解できる。現実の中の否定されるべき側面が、しばしば突出した表現の対象となっている。たとえば、一九二〇年代の小説の中では「老張」（張さん）「藍小山」「欧陽天風」などの人物を登場させ、彼らの悪辣、無恥、飽くことのない貪欲を描くことにより小市民的封建意識、利己主義、愚鈍さや無感覚を批判し、中国学界の腐敗や社会全体の暗黒を暴露し、さらには西側世界に深く根ざした民族的偏見と、この種の偏見が人類の最もすばらしい情感をいかに損ねるかを明示した。一九三〇年代の小説の中では、老舎の批判はさらに強化された。空想科学警世小説『猫城記』（猫の国）では、批判の矛先を直接反動的な統治当局に向け、社会の一切の領域を透視して解剖し、『離婚』では官僚機構の腐敗と凡俗な下級公務員たちの無気力ぶりを暴露し、さらには現代庶民文学の教典である『駱駝祥子』（らくだのシアンツ）では人を心の底から揺り動かす悲劇の形式により都市の下層の人びと、労働者の深い苦難と絶望的なもがきを描いた。一九四〇年代に創作された三部作『四世同堂』は、老舎の生涯の創作活動の中で特に重要な作品であり、この大作の中で彼は社会に対する批判と文化に対する批判をさらに広げ、深化させた。作品は外敵の残虐な統治、売国奴の卑劣な活動、知識人の善良で臆病な姿と苦悩を描き、市民の生活様式の封建制とこのような生活様式を生んだ保守的な一時逃れの生活に対する態度を批判し、伝統的な思想や文化、民族の精神的素質と心理状態に対する多くの弱点を指摘したが、これらはいずれも、人びとがこうした真実を読んで恥ずかしくまた恐ろしいと感じたとしても一向にかまわない、作家としてその真実を隠すつもりなど全くないことを示すほどであった。魯迅の『阿Q正伝』を連想させる。これと同時に、老舎はこれらの作品の中で自由にさまざまな社会改造の意見を主張する。戦争時代に「いい加減にごまか

す連中[2]」が生み出され、平和な時代が人びとの「お茶を濁す」習性を育んだ北平（北京）文化に対する懸念をあらわし、平和を愛するだけではなく、必要なときには「平和と真理のために進んで犠牲になる」という「新しい文化[3]」への明らかなあこがれを示し、このために文学活動において情感の発散という欲求を満たしたのである。これからみても、文学の創作は老舎にとって拒むことのできない精神的な欲求であり、同時に彼は創作によって自我の実現と情感の発散という欲求を満たし、精神の自由を得た。これが老舎の小説の主観的価値の主な内容の一つである。

文学の主観的価値は、さらに審美的価値も含んでいる。老舎の小説は彼独自のスタイルをもち、内容豊かで、美に満ちた世界を創り上げているが、その際だった特徴は、彼が内外の名著を博覧した上に作り上げた悲喜こもごも且つ意味深長なユーモア芸術であることだ。内外のユーモア芸術の大成であり、機知と風刺など各種手法と情緒を一括して人生哲学の詰まった芸術的表現にしているゆえに、最も強烈に美の感覚を発することができ、極めて深い印象を与える。著名な学者である黄苗子は、理性と知恵に満ちた老舎のユーモアは完全にアメリカのマークトゥェインに匹敵すると認識している。老舎の小説は、満州族文化、北平文化、中国文化、西洋文化など多重の文化の蘊蓄、縦横に交錯する文化的思考、世界の文化の精髄が融合して形成された多くの形や味わい、また少なからぬ西洋の表現方法から吸収した独特の言葉が人びとに与える多方面にわたる美的観念によって、文学が人びとの性質を陶冶し、すばらしい情感を養うという個人的価値を充分に体現している。

2．客観的価値

文学の客観的価値は、社会の文学に対する要求と相関関係にあり、おもに文学の政治的価値と倫理道徳的価値を指す。文学の政治的価値とは、一般に文学作品の社会や政治に対してもっている影響力をいう。文学の政治的価値

は、直接および間接の多種類の方式により表現される。老舎の小説のなかで政治的観点がかなり強く現れている作品は、「国事に対する失望」すなわち中国の「軍事と外交のさまざまな失敗」がつくりだした「憤りと恨みから失望へ」という状況のもとで政治的寓話の形式で書かれた『猫城記』にちがいない。この風刺小説は明らかな欠点はあるものの、種々の社会の弊害のもとを広く暴露するだけでなく、反動的統治者のさまざまな失敗や過去の悪行こそ社会の暗黒と混乱を創りだし人民を重大な災難に陥れる根源であることをそのものズバリ指摘している。老舎は小説の中でさらに、「知識」と「人格」などが政治、社会、文化を改造するという対策を提起したが、これらの対策はまるまる一世代人にわたる社会改革の思索を反映させているだけでなく、長期的な効果をもつ文化の改造過程とみることもできる。老舎が文学作品を通じて提起したこれらの改革の主張は人びとに知らず知らずのうちに進歩思想の影響を与え、国を強くし人びとに利を与えたなにがしかの方法であったことは明らかで、彼の小説の社会的価値がはっきりと理解できる。

文学の倫理道徳的価値とは、一般に文学の「善をほめて悪を抑える」という社会的な働きを指す。それは政治的価値より普遍性をもち、それゆえに文学の社会的価値のなかでより重要な地位を占める。もとより「倫理文化型」作家として知られている老舎は、創作の中で、人間世界の善と悪、崇高と野卑が構成するさまざまな矛盾の衝突、そしてそれが導きだすいくつもの悲喜こもごもの離合集散劇を多くの角度から描いている。たとえば『老張的哲学』では、半封建半植民地の中国の倫理道徳状況に対して精確かつきめ細かい観察をし、極めて適切で形象的な描写をした。悪の手本である主人公「老張」は「罪悪のはきだめ」に描かれ、その「道徳の欠けた挙動は常人の想像を超えている」。中国古来の封建意識と現代の西洋の拝金主義を一身に集めた時代の奇形児として、老張は北京郊外の小さな村で「人間性皆無の財産取り立て」[4)]を行い、王徳を怒りの余り気が狂うほどにさせ、李静を死なせ、李応と龍鳳を離散させるなど多くの悲劇を演出した。老張の悪徳と相呼応し、また

対照を為しているのは、すべてに20世紀の西洋文明の道徳における否定的側面をまねようとする藍小山である。そして小説の中でとりわけ深く考えさせられるのは、李静が嫁に行く前、それまで慈しんでくれた趙伯母さんが李静の悲劇の中ではたした役割である。「あたしは、あたしの姪を、自分の子供同然に可愛がっています。愛していればこそ、あたしはあの娘に好いた人があるなんて、そ、そんなこと絶対に許しません！ええ、許しませんとも！[5]」このせりふは、趙伯母さんの念頭に古今にわたり変わらぬ倫理観念があることを語っている。この人を殺して何の血痕も残さないような陰険悪辣な封建倫理観念は、知らず知らずのうちに趙伯母さんを老張の共犯者にしてしまい、李静はその若い命をあまりに早く終わらせてしまうのだ。『駱駝祥子』はおとなしく純朴な「祥子」（シアンツ）が一連の打撃を受けたのち精神的に堕落してゆく話であるが、この小説おいて「老舎の都市の中の‘欲’（情欲、財産への貪欲）に対する嫌悪感、都市の人倫関係のなかの‘醜さ’に対する反感は、いずれも道徳を細かに見ることから出発している[6]。」『四世同堂』では、おもに文化的角度から、特殊な時期に表現された北平市民の倫理、道徳に対して詳細な観察を行った。この時期のさまざまな売国奴の失敗や過去の悪行について、老舎はとりわけ文化の上からその原因を探ることを重視し、「冠暁荷」「大赤包」「藍東陽」「胖菊子」「祁瑞豊」「李空山」などの無頼たちによって構成される醜い人間模様を描くことにより、つぎのようなことを示すことに努めた。「中国の長い封建時代において、官位が上がって財をなすことは、終始広く羨望と模倣を引き起こし、人びとは盲目的に官服に身を固めた権力者に頭を低くし、彼らの権力が不当な手づるや取引によるものであるかどうかに注意を払うことはなかった。そこで、正常な状況下でも、あらゆる代価を惜しまずに権勢にとり入ることが常に行われ、もし権力交代の局面に遭遇すれば、道徳をかなぐり捨てることと引き換えに己の立身を計ろうとする風潮がさらにはびこる。たとえ外敵が侵略して支配者になったとしても、この種の茶番劇は引き続き演じられ、衰えることはないだろう[7]。」彼の

小説の社会的価値は、このような社会批判の姿を以て示され、「善をほめて悪を抑える」というかなり大きな社会的な効能をもっている。

老舎の小説の価値を論ずるにあたり、冒頭の八万字が書かれただけで自ら執筆中断の道を選ぶこととなった、本来ならば後世に伝えるべき作品になった筈の『正紅旗下』を、深い遺憾の念とともに思わずにはいられない（まだ1966年に始まる文化大革命前ではあったが、老舎はすでに空前の政治的圧力を感じて、当時の政治ムードとは遠く離れているこの創作を中断せざるをえなかった）。もしこの珠玉の如き作品が当初の計画通りに完成していたならば、必ずやこの巨匠の小説類の中で最も価値ある不滅の名作となっていたであろう。冰心氏がこのことを「永遠の遺恨である[8)]」と称しているのももっともである。

とはいえ、偉大な老舎が私たちに豊穣なる小説の世界を贈ってくれたことは誰も否定できない。そしてその豊穣の世界は、それが有する多層にわたる無限の価値を以て、彼の人間的魅力及び彼の求めた文学の道がわれわれの現代文学構築に対して与えてくれる多方面にわたる啓示とともに、永遠に共存するものである。

注

1） 胡絜青編『老舎写作生涯』175頁、百花文芸出版社、1982年版。

2） 舒済・舒乙編『老舎小説全集』第6巻、185頁、長江文芸出版社、1993年版。

3） 舒済・舒乙編『老舎小説全集』第7巻、243頁、長江文芸出版社、1993年版。

4、7） 関紀新『老舎評伝』103、364頁、重慶出版社、1998年版。

5） 舒済・舒乙編『老舎小説全集』第1巻、109頁、長江文芸出版社、1993年版。

6） 温儒敏「論老舎創作的文学史地位」『中国文化研究』1998年第1期。

8） 冰心「読老舎遺作『正紅旗下』」『民族団結』1979年第3期。